



留多柳風俳

宮田正信 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第六三回)

誹風柳多留

はいふうやなぎだる



定価一八〇〇円

昭和五十九年二月五日 印刷
昭和五十九年二月十日 発行

校注者 宮田正信

みやた まさのぶ

発行者 佐藤亮一

さとう しょういち

印刷所 大日本印刷株式会社

発行人 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 東京03(二六六)五一一一(業務)

東京03(二六六)五四一一(編集)

振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎

組版 シーティエス大日本
製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例	三
----	---

誹風柳多留	二
-------	---

解説	二四
----	----

付録

原作 対照 誹風柳多留	二六七
----------------	-----

初句索引	三〇
------	----

凡 例

『誹風柳多留』は明和二年の初編から百六十七編の終刊まで、紆余曲折があり、その内容も多様であるが、本書はその初編が「誹風柳多留全」と題して、単行句集として出た最初版本を底本とし、後年「初編」と改称されて、後続諸編のはじめに据えられることになるこの句集の、本来の面目を明らかにめようと意図して試みた注解である。

〔本文〕

一、底本には、他に伝本のない架蔵本を用いた。書型は縦一五・五纏、横一一・〇纏。藍表紙。左肩の杵持ち茶色題籤だいせんは上部の「誹風」の二字分を破損し、「柳多留全」の下四文字を残す。奥付は下半分を破損。いずれも架蔵の初編の善本の題籤・奥付を以て補った。

一、底本の版下は美しい書風で、印刷極めて鮮明。かつ現存初編の諸本には見られぬ丁付がある。残念ながら、総四十三丁のうち一・十一・廿四・廿七・四ノ三の五丁分は摺り損じらしく、欠損しているが、丁順に狂いはない。初編の現存最善のテキストである。

一、所収句に通し番号を付して本文とし、頭注の番号と対応させた。

一、原作の判明している句については、原作の前句まえくを本文の次に掲げ、その下に出典を注記した。前句を示さぬ句は出典不明の句である。

一、原作と句形に異同のないものは、前句のみを掲げた。この場合は、本文の句を前句の次に置き換えて、原作の前句付に復元して、原作の付句と本文の句との違いを読み比べることができる。

一、本文の句が原作と句形を異にする場合は、原作の句を前句の次に掲げ、原作の姿を再現させて、独立句として読まれる本文の句と、前句付の原作とを読み比べられるようにした。ただし、明らかに誤記による異同の微細は、付録「原作対照誹風柳多留」に譲って不問に付した。411・421その他。

一、本文の句と原作とが句形を異にする箇所のはかは、読みやすいように相互に表記の統一を図った。

一、仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一をはかり、漢字・仮名の字体は現行の字体に改めた。

一、表記は読みやすいことを旨とし、原本の漢字を仮名に改め、逆に仮名に漢字を宛てたものもある。また、漢字には適宜振り仮名、送り仮名を施した。

一、適宜濁点を施し、明らかな誤字は訂正した。

一、「かぶり」「かむり」等の相違は、いずれか一方をとり、その旨頭注で断った。

一、原作の前句はすべて「にぎやかな事く」の如く、七字句の繰り返しであるが、おどり記号を廃して「にぎやかな事にぎやかな事」の如く現代風に書き変えた。仮名の羅列で、かえって読みづらくなったものもあるがやむをえぬ。

一、前句の下に注した出典の読み方は次の通りである。

- 1の「宝曆七年八月二五日」は、同年月日開きの川柳評万句合の勝句刷に載っていることを示す。
- 2の「宝曆九年・松1」は、宝曆九年の合印「松」の勝句刷の第一枚目に載っていることを示す。
- 79の「宝曆九年・桜」の如く数字を欠くものは、勝句刷の何枚目か分明でないことを示す。

一、公開されている川柳評万句合の勝句刷で、本書の出典関係分の刊行表を次に掲げる。該当欄の月

[illegible]

頭注は、(1)句解(色刷り)(2)句移り(3)典拠・語釈・鑑賞等(4)原作の前句付鑑賞の手引きの順序かなる。

前句付の付句は本質的に客觀的敘事的性格をもっている。また、前句付の付句は前句なしにはその存在理由がない。従つて、付句は前句に対して相對的獨立性しかもっていない。それは連歌にしても俳諧にしても前句付にしても同じである。その客觀的敘事的性格を特質とし、前句に対して相對的獨立性しかもたぬ前句付の付句が、『誹風柳多留』に組み入れられて、付合つあひの世界から解き放

たれると同時に、完全な独立句となる。更に、その際編者による原作者の関わり知らぬ意図的添削の手が加わると、すでに半ば編者の独詠句となる。そこに、原作が付句としてもつていた客観的叙事性が薄れて、多くの句は有情の句となる。それが『俳風柳多留』の句の特質である。だから、後世のいわゆる狂句仕立ての句に対するのと同じ物尺ものさしを用いて、「謎解き」「仕掛けばらし」風の作業だけに留まっただけは、句解とは言いがたい。ここでは句のもつ韻律的表現にこもる一句の情と意が、なるべく活かせるように心がけて句解を試みた。

(2) 句移り

編者は句の配列に、一句一句読み進む句移りの楽しさを読者に提供してくれている。句の並べ方に俳諧風の趣向をこらしている。書名に「俳風」の二字を冠した理由である（「解説」参照）。このような句集の編集は前人未踏の新機軸である。その編者の手の内を覗いてみた。小鳥が花の枝移りするような楽しみを提供できればと希ねがって。色刷りの「句解」に続く、すぐあとの数語乃至一行前後の記述がそれである。「二三の例について、読み方と説明の補足をしておこう。

2 「かみなりを」、3 「上がるたび」 以上二句については「解説」（二六〇頁）を参照されたい。

4 「古郷へ」の句——「頼もしい女房の句から気弱な男の句へ」

前にある「上がるたび」の句には頼もしく得意気な女房の意気揚々とした姿が見える。それとは対照的な、廻国巡礼に出ているながら国のことが気にかかる風情の、意気沮喪きそうした男の句が配してある。人物・場面の変転に対照の妙を見せた配列とみえる。元気な女房の姿が消えると、足取りもおぼつかない巡礼男が現れる。

5 「ひよひよの」の句——「故郷へ廻る六部から乳児を抱えた女房へ」

「古郷へ」の句の六部には国の女房子供の影がさしている。それを受けるように、幼児に着せる物一つにも、亭主の機嫌をうかがいたためらう風情の女房の句を配してある。場面の自然な回転である。

6 「番頭は」の句——「亭主にねだる女房に、主家の娘をねらう番頭」

「ひよひよの」の句の女房は、我が子への愛情の発露。番頭は色と欲の二道かけた算盤そろばんずく。同じねだりにも、やさしいねだりと、えげつないねだり。この配列もまたおもしろい。

ここには私解の一つを示したにすぎない。別解の成り立つものも少なくはない。また紙幅の制約もあり、骨組みだけの提示で意を尽し得ぬ恨みがあるが、これを手掛りに読みを深めてもらいたい。

(3) 典拠・語釈・鑑賞等

句の典拠となった古典・江戸の風俗・年中行事・習慣・俗信など、句解の参考とすべき事柄についての説明を補充した。あわせて語釈等のほか、原作との句形の相違点など、表現に関して句の鑑賞上留意すべき点などについて述べた。

(4) 原作の前句付鑑賞の手引き

◆印の一項である。本文の句で出典の明らかなものについて、その句の原作が前句付の付句としてもっていた句境を、理解するための手引きを試みた。それは、『誹風柳多留』の句が、原作の前句付の付句と句境を異にするところを、具体的にそれぞれの句について、読み比べる手がかりになるはずだから。原作の句が前句付の付句として成立した段階で、原作の句の作者が、課題の前句をどのような受けとめ方をしたのか、付句をどう案じたのかを述べてみた。しかし本項も多くは説明不足で、単に付合つけあひの骨組みを示すにとどまって、意を尽し得ていないものが多い。ここに若干の例をあげて説明を補っておく。

1 「五番目は」の句の◆印——「前句を、常葉院境内の賑わいを称^{たた}える嘆声とし」とあるのは、原作者が前句の「にぎやかな事にぎやかな事」を、そのように受けとめたという意で、「それに応じた連れの言葉を付ける」とは、その嘆声を聞いた連れの男が「五番目は同じ作でも江戸産れ」だと、応じたという体^{てい}に趣向して、「五番目は」の句を、前句の「にぎやかな事にぎやかな事」に、付句として付けたという意である。「五番目は」の句は『誹風柳多留』では独立句であるが、原作では同じ句が「にぎやかな事にぎやかな事」に対する付句として、二人の人の對話の体をなして、前句と向い合っていたのである。

2 「かみなりを」の句の◆印——この場合は『誹風柳多留』の句と原作の句との間に、句形の異同があるので、前句の次に掲げた原作の付句と前句との付合関係である。「前句を、裸で逃げ廻る幼児をすかす母親などの掛声として」とは、「こはい事かなこはい事かな」を、付句の作者がそう解したという意である。「その人の働きを付ける」とは「かみなりをにせて腹掛やつとさせ」が裸の幼児を追う母親などの働きぶりを、描いてみせた付句であるとの意である。

なお、この場合は、原作と『誹風柳多留』の句との間に「にせて」「まねて」の相違があるだけで、句意にはほとんど変動を来たしていない。従って、原作の前句をかりに『誹風柳多留』の句の前句としても、付合の上でも全く異同は生じない。しかし、こんな例ばかりではない。

9 「米つきに」の句の◆印——この場合「前句を、仕事の邪魔をされ迷惑がる人の心情とし」とは「じやまな事かなじやまな事かな」を付句の作者がそう解したという意。「道を聞かれ仕方なく手を休めた米搗の挙動を付ける」とは「米つきは道を聞かれて汗をふき」という付句の作意の説明である。しかし、この例では、原作の付句が『誹風柳多留』に収録されたとき、編者が著しく改変

を試みて、全く別個の独詠句になってしまっている。この句の場合は、原作の前句はもはや全く無縁の存在になっている。原作の前句を、かりにも、本文の句に番^{つが}えてみることは全く意味のないことである。

同様の例はほかにも少なくはない。112・113・163など、いずれも好例である。それぞれの頭注を参照されたい。

なお、前句付のおもしろさは、題の前句を付句の作者がどのように解釈して、どう対応するかにある。それが付合の妙味であり、その出来不出来は、付句の出来具合でさまる。付句の作者にとつては、付句をどう描いて見せるかが重要なので、付句に描き出された世界（風俗・事件・人情・風景等）に直^{じゆ}に感動して句が生れるのではない。前句を手がかりに事件を架空に設定して、頭の中で作り出された世界——それが付句である。その素材は平生の体験の蓄積の中から選^えび出されて来るにしても。そのような句を前句に対して案^あじ出した手柄を賞^うで、または仕損^じじて口惜^くしがる。己の付句を客観視するところに、付句の心の本領がある。付句の作者は常に自分の句を覚めた目で見てゐる。それが独詠句との越え難い相違点である。この点については、同一前句につけた原作の事例を読み比べてみると、前句の取り方、付句の案^あじ方の多様性を具体的に窺^{うかが}うことができる。例――

402・403・404・405

〔解説〕

序文の記述を手がかりに、本書の成り立ちと、その環境・歴史的背景を述べ、これが前人未踏の新奇な編集法から成る句集であることを説いた。次に、その成立に關与した人々について考え、編者呉

陵軒可有を中心に据えて、前句付点者川柳の立机から、本書出版に至る経緯を考察し、最後に、本書が武家の町江戸が開府以来はじめてもち得た、自前の士民一体の新興文学であり、ただに川柳風狂句の先導役をはたしたばかりでなく、洒落本・黄表紙など続々開花する後続江戸文学の露払いをつとめた文学史的意義にも説き及んだ。

〔付 録〕

付録として巻末に「対照俳風柳多留」と「初句索引」とを収録した。なお「原作俳風柳多留」は『俳風柳多留』の句と川柳評万句合の勝句刷所掲の前句付の原形とを対照して、原作の前句付から『俳風柳多留』への跡を子細に検し得るようにした。可能なかぎり原本通りを心がけ、前句付から『俳風柳多留』へ、更に本書の本文へと、改変の跡を辿り、本文の読みの当否をも確かめることができるようにした。「初句索引」は本文の句の検索の便に供した。

（付 記）

本書の成るにあたり、御生前に垂れ給うた御薫陶を顧み、恩師頼原退蔵・水木真弓・岡田朝太郎三先生の御霊に謹んで深甚の謝意を捧げ奉る。

現在までに公刊された『俳風柳多留初編』の注釈書に、沼波瓊音著『柳樽評釈』（大正六年南人社刊）、武笠山榊著『俳風柳樽通釈』（昭和二年有朋堂書店刊）、西原柳雨著『俳風柳多留講義初篇』（昭和五年岩波書店刊）、大村沙華編『柳多留輪講初篇』（昭和四十七年至文堂刊）等がある。そのいずれにも多大の恩恵を蒙ったが、一々断り得なかった。ここにその由を記して謝辞にかえる。

誹風柳多留

一 去年。ここでは宝曆七年以来の過去数年間の意。

二 前句付の興行（解説参照）の際に勝句（入選句）を高點順に印刷して發表した刷物。こは柄井川柳が前句付の万句合興行の都度發行した勝句刷のこと。

三 江戸下谷竹町二丁目の本屋、星運堂花屋久治郎をさす。通称久次郎。菅裏と号し句も作る。『俳風柳多留』の版元で、二六編から六〇編までの大半は同人の編。江戸座俳書を中心に雑書を出版。『俳風柳多留』は創業間もない頃の企画。文化十四年正月晦日没。法名默翁二旧信士。墓所、浅草南昌山東岳寺。享年不詳。

四 今、江戸で流行している俳諧の作風。いわゆる江戸座の俳風をさす。

五 「ふるとしの前句附のすりもの」が川柳評万句合の勝句刷であることを暗示した修辭。「いもせ川」は妹背（夫婦）の仲を川に喩えた言い方。ここでは川柳評の前句付と江戸座の俳諧とを妹背の仲になぞらえて、その仲をとりもつめてたさに困んで、婚礼の祝儀に用いる柳樽に名を借りて書名とするの意。

六 明和二年（一七六五）西年の陰曆五月。

七 呉陵軒可有の住所。金龍山浅草寺（せんそうじ）のほとりで、山号「金龍山」の縁で「麓」とも書いている。

八 川柳が前句付の万句合興行をはじめた当初からの作者。号は木綿。『俳風柳多留』一二編までを編み、天明八年五月二十九日没。『呉陵軒可有』の号の由来については二〇編の雨譚の序に詳しい（解説参照）。

序

五月雨の徒然に、あそこの隅、ここの棚より、ふるとしの前句附のすりものをさがし出し、机のうへに詠る折ふし、書肆何某来りて、此儘に反古になさんも本意なしといへるにまかせ、一句にて、句意のわかり安きを挙て一帖となし（付句だけで意味の分りやすい句を抜き出してあげ、いちど一冊の句集としたその中には）ぬ。なかんづく、当世俳風の余情をむすべる秀吟等あれば、いもせ川柳樽と題す。于時、明和二酉仲夏、浅下の麓、呉陵軒可有述。

1 五番目の阿弥陀様は、よそのとは訳がちがう。

同じく行基の作でも、こちらは江戸っ子だ。

行基（奈良時代の高僧）の作と伝える阿弥陀像を安置した六つの寺を巡拝することを六阿弥陀詣でと言い、春秋の彼岸には特に賑わった。他の五か寺は江戸の郊外にあったが、五番目の下谷広小路常楽院だけが江戸府内にあったので「江戸産れ」と言いはやした。一句の眼目は「五番目」「同じ作」「江戸産れ」とヒントを重ねて、常楽院の阿弥陀像を暗示した謎仕掛けの趣向にある。江戸意識の強い「江戸産れ」の語には、この『群風柳多留』が生粋の江戸の句集であるという、編者の主張がこもる。この句を巻頭に据えた理由である。

◆ 前句を、常楽院境内の賑わいを称える嘆声とし、それに応じた連れの言葉をつける。

2 「雷だ。臍をとるぞ」と追い廻し、やつとのことで腹掛をさせ、「やれ手のかかる子だ」。

江戸産れの余意を受けて、幼児の句を配した。夏の日の家庭の瑣事を描いてほほえましい。「やつと」に母親の情が活写された。原作の「にせて」は生硬稚拙。「まねて」とやわらげて、句調が整った。

◆ 前句を、裸で逃げ廻る幼児をすかす母親などの掛声として、その人の働きを付ける。

3 かつての奉公先へお伺いするたびに、どつきり戴き物をせしめて来る頼もしい女房だ。

幼児の世話から女房の句へ。さるお屋敷へ乳母奉公に上がつていたと見える。その奥方へご機嫌伺いを怠ら

1 五番目は同じ作でも江戸産れ

にぎやかな事にぎやかな事

宝暦七年八月二十五日

2 かみなりをまねて腹掛やつとさせ

こはい事かなこはい事かな

宝暦九年・松一

かみなりをにせて腹掛やつとさせ

3 上がるたびいつかどしめて来る女房